

連続市民講座 Vol. 10

「水俣から照らす原発災害と足尾銅山鉍毒事件」

日 時：2015年6月28日

場 所：宇都宮大学 大学会館 2F 多目的ホール

主 催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター (CMPS)

プログラム

- 10:00 シンポジウム開始 【総合司会】趣旨説明・登壇者紹介 高橋若菜 (国際学部准教授)
- 10:10 第一部 ほっとはうす関係者による講演と質疑応答
加藤タケ子氏 (ほっとはうす施設長)
松永幸一郎氏・永本賢二氏 (水俣病受難者)
- 11:20 第二部 足尾銅山鉍毒事件と原発事故との関係から
＜パネルディスカッションと質疑応答＞ 【司会】清水奈名子 (国際学部准教授)
パネリスト 栃木避難者母の会関係者 (FnnnP Jr.の学生による代読)
西川峰城氏 (那須野が原放射能汚染を考える住民の会会長)
高際澄雄氏 (谷中村の遺跡を守る会会長)
- 12:25 閉会挨拶 多文化公共圏センター長 渡邊直樹 (国際学部教授)

記録：阪本公美子

本講座では、地域に根差しつつ世界的にも公害・人権問題について活動してきたほっとはうすメンバーを熊本県からお迎えし、学生や市民が約130人参加するなか、身近な問題である原発災害と足尾鉍毒事件について考察しました。シンポジウムに先立ち、3.11原発災害以降活動してきた福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト (FSP) のメンバーが、活動を通して水俣病に取り組んでこられた方々に出会い、また身近な足尾鉍毒事件からも示唆を受けてきたことが、本企画の契機となっていることを、高橋教員が紹介しました。

第一部のほっとはうす関係者による講演では、まず施設長の加藤タケ子氏が、水俣病受難者とともに活動し、共有してきた思いについて語りました。ほっとはうすでは、水俣病受難者の方々が苦難だけでなく、日々の挑戦、そして

悲劇の中にこそ希望や未来があることを社会に伝えてきました。これが「水俣病から宝物を伝えるプログラム」です、とお話し頂きました。

松永幸一郎氏は、20歳代ではじめて自分が水俣病であることを知りましたが、年代から計算して、チッソの工場排水が水俣病の原因であるとわかった昭和34年に排水を止めていれば、彼が生まれた38年の海の状況は改善されており、被害を受けなかったかもしれないことを本当に悔しく感じていました。近年、車いす生活になりましたが、なおチッソに対して「嫌い」「自分の足を返せ!」という気持ちが強まってきました。公害によって長年苦しんできたなか、原発事故も他人事だと思えず、「原発の再稼働ストップ水俣の会」の代表も務めています。

水俣はチッソの城下町で、町ぐるみで水俣病を隠す構造がありました。そんな風潮のなか、

II 活動報告

永本賢二氏のお父さんは、チッソ工場に勤めている身でありながら、賢二氏の水俣病を隠さず、工場と直接交渉してきました。そのようなお父さんに感謝しながらも、小学校では「補償金で何でも買えていいねえ」といじめられたことが、今でも嫌な思い出としてあります。そういつた時でも、家から見えるチッソのクレーンが慰めてくれました。水俣病の原因であるチッソは、お父さんがチッソの労働者として誇りをもって働いてきた場所でもあり、幼いころから慣れ親しんだ風景でもあったのです。

講演に対して、熊本出身の学生から水俣病の現状についての質問があり、講演者からは水俣病受難者の現状と国の対応との乖離とともに、水俣出身者が差別に対して対抗できる力をつけつつあることが紹介されました。

第二部では、原発災害と、足尾鉍毒事件に関連づけて、清水教員の司会のもとパネルディスカッションを行いました。まず栃木避難者母の会の大山香氏から、ほっとはうすの「水俣・命のプログラム」に感銘を受けたということと、福島を訪問した加藤さんの感想に関する質問がありました。同会の内田啓子氏からは、ほっとはうすの方々に出会い、一人の人間として社会の中で力強く生きようとする心に触れ、感動・共感し、無関心がもっとも罪深いということに気づき、関心を広めていく方法について質問がありました（ともに学生代読）。ほっとはうすのみなさんは、栃木避難者母の会のお二人と共感されるとともに、質問に対しては、原発災害の事故被害は水俣を越える危惧が語られました。その中でも、やはり「伝える」ことが重要になってくることが確認されました。

次に、栃木県北で、放射能汚染に関する市民活動を活発に行っている西川峰城氏（那須野が原放射能汚染を考える住民の会会長、栃木県北ADRを考える会代表）に、栃木

県の放射能汚染状況についてお話し頂きました。西川氏が綿密にデータを分析したところ、放射能汚染は、福島県だけの問題ではなく、栃木県北も場所によって同等の高い濃度のセシウム汚染が残っていることが明らかになっています。しかし「原発事故子ども・被災者支援法」などの施策の「支援対象地域」は福島県に限定されており、栃木県では対応がおろそかになっています。そのこともあり、裁判外紛争解決手続（ADR）を2,200世帯を超える県北住民とともに取っています。

最後に、谷中村の遺跡を守る会会長であり、宇都宮大学名誉教授でもある高際澄雄氏に、足尾鉍毒事件と谷中村、並びにその認識の変化についてお話し頂きました。谷中村は足尾鉍毒事件で渡良瀬川等の流域汚染が明らかになった後、治水を理由に犠牲となり遊水池化され、消滅させられた村です。高際はこれまで谷中村の歴史に関する教育活動や、ラムサール条約の登録について活動されてきましたが、今回は、これまで理解できなかった田中正造と対立した村長の孫を理解することによって、谷中村内部の複雑さがみえてきたことをお話し頂きました。また、人びとが平和のうちに自然の恵みを享受しながら、仲良く天命を全うするまで暮らせる社会を造ることが政府・自治体・コミュニティの目標であるべきだという田中正造の主張も紹介されました。

これらの講演とパネルディスカッションを受けて、4名（市民1名、学生3名）の質問やコメントがありました。中でも、民間企業が起こした足尾鉍毒事件や水俣病と、原発事故の相違について指摘し、本シンポジウムの意図を問うた質問については、熱い議論が交わされました。パネリストからは、このような自由な発言や議論ができる宇都宮大学の環境に敬意を示しつつ、原発事故を起こした東京電力だけでなく、足尾鉍毒事件を起こした古河鉍業も、水俣

病事件を起こしたチッソも、国の基幹産業として国家と密接にかかわっていたこと、そして3つの事件が命を蔑ろにした共通点が指摘されました。さらに環境専門の高橋教員からは、再生可能エネルギーに本腰を入れてこなかった国策によって、日本で原子力発電か火力発電かという二者択一的構図をつくってきた問題も指摘されました。また本シンポジウムは、経済成長や便利な生活のためには多少の環境破壊は仕方がないという風潮の中、隠された被害や声を聞く機会を設け、理解を深めた上で、学生・市民が主体的に社会、そして将来の在り方について各々考える場として設定されたことについて確認されました。最後に、渡邊センター長より、主催者を代表して登壇者に対する感謝の意とともに、閉会が述べられました。



詳細については、「連続市民講座 vol.10 報告書 一水俣から照らす一原発災害と足尾銅山鉍毒事件」(2015年11月)をCMPSホームページ上の「逐次刊行物」からご参照ください(<http://cmps.utsunomiya-u.ac.jp/>)。年報巻末の関連資料に新聞記事(東京新聞2015年6月29日)も掲載しています。

水俣

から照らす

原発災害と足尾銅山鉍毒事件

このシンポジウムは、地域的・国際的な活動を展開してきた水俣病受難者・支援者の方々を熊本県水俣市からお招きし、そのご経験から学ぶとともに、足尾銅山鉍毒事件や原発被災問題との関連性を考える企画です。

日本が先進工業国として「発展」を遂げてきた背景には、どのような犠牲が発生してきたのか、そして問題解決のためには何が必要であるのかについて考えます。

2015年6月28日(日)

入場無料・事前予約不要

時間 : 9時30分(開場・受付開始) ~ 12時30分(終了予定)

場所 : 宇都宮大学 峰キャンパス 大学会館2階 多目的ホール

主催 : 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター(CMPS)

* プログラム *

- 9:30 開場・受付開始
- 10:00 開始・企画の趣旨説明・登壇者紹介（総合司会：高橋若菜／国際学部准教授）
- 10:10 **第一部** 水俣で活躍されるほっとはうす関係者による講演と質疑応答
- 11:20 **第二部** パネル・ディスカッション（司会：清水奈名子／国際学部准教授）
～足尾銅山鉱毒事件と原発事故の関係から考える～
- 12:30 終了（閉会の挨拶：多文化公共圏センター長 渡邊直樹／国際学部教授）

* 登壇者紹介 *

永本 賢二（ながもと けんじ）

水俣病受難者。1959年生まれ。資料館でも皆の代表で語り部として活躍中。「梅戸港のチツのクレーンはスーパーマンかウルトラマン、水俣病や障害を理由にいじめられていた小学生の僕を励ましてくれた。」辛い語りの中にも詩人のセンスとユーモアが光る。

松永 幸一郎（まつなが こういちろう）

水俣病受難者。1963年生まれ。5年前は、マウンテンバイクで快走していたが今は車いすをかつこよく乗りこなす。排水が原因と知りながら生命がないがしろにされた水俣事件に、たまらない悔しさがこみあげる。それでも、誰にも負けない将棋3段の腕前は自慢の力、肥後名人戦地区代表の優勝の賞状は宝物。

加藤 タケ子（かとう たけこ）

ほっとはうす施設長。1950年生まれ。人ほどどんなに重い障害があっても地域で働いて生きていくことを大切にされることを日々実践。患者さんと共に水俣病から宝物を伝えることをライフワークとし、声をかけられたら世界のどこへでも出かけていく実践家。患者さんに寄り添う日々から、たくさんの方の気付きをいただいている。

西川 峰城（にしかわ みねき）

「那須野が原の放射能汚染を考える住民の会」及び「栃木県北ADRを考える会」代表。那須塩原市在住。

高際 澄雄（たかぎわ すみお）

宇都宮大学名誉教授。宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター前センター長。放送大学客員教授。2014年10月より谷中村の遺跡を守る会会長。専門領域はイギリス文化・文学研究。主として、イギリス18世紀文学と文化の研究に従事。現在、ヘンデルの歌劇と文学の関係を調査。



* **会場アクセス** 宇都宮大学 峰キャンパス
〒321-8505 宇都宮市峰町350

* **お問い合わせ先**
宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター(CMPS)
TEL/FAX : 028 - 649 - 5228 (月火水金 9:00～17:00)
E - mail : tabunka-c@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp